

ハワイにおける戦後移住の女性たち ～連載「がんばるハワイの新一世」から～

影山穂波*

Japanese Women in Hawaii

Honami KAGEYAMA

1. はじめに

日本人移民が最初にハワイに到着したのは1868年であった。明治元年にちなんで元年者と呼ばれた日本人のハワイ移住から、140年が経過する。本格的に官約移民が開始されたのは1885年で、ハワイにおける日本人は増加の一途をたどった。現在では当時の一世が姿を消し、二世も高齢化している。ハワイといえば、観光地として「憧れの楽園」のイメージが強い(山中1992など)。しかし観光地としてではなく、変容する社会と文化に注目することで見えるハワイを描くことは、ハワイの場所としての意味を考える上で重要である。ハワイにおける日系人の歴史に関しては、王堂・篠遠(1985)が図説を著している。高木(1985)、中嶋(1993)は概論としてハワイの社会の中での日系人の位置づけを示している。地理学分野においては久武(1998, 1999)、飯田(1998, 2003)などの研究が見られる。久武(1998)は1920年代前後のマウイ島を事例に、サトウキビプランテーションの生産構造の転換期において、労働者のエスニック構成がどのように変化していったのかを、労働形態、賃金、居住形態などに注目して検討している。飯田(1998)は、マウイ島における日系人の職業と居住地に関して、出身県にも注目しつつ明らかにしている。これらの研究は、日系人の割合が、ハワイ全体で40%にも達していたという1920年前後に注目して、地域を可視化している。また飯田(2003)は、マウイのみならず、ハワイに居住する日系人の居住地と職業を検討している。日系人に関しては、ライフストーリーの聞き取りを始め、Kotani(1985)、Okumura(2002, 2008)、Yano(2006)などの研究がある。

戦後日本から移住してきた人たちに関する調査はほとんどみられない。しかし城田(2004a)は博物館における展示から日系人・沖縄系移民の歴史をたどり、現代にまで考察を加えている。また城田(2004b)はオキナワンの踊りや歌にも注目している。ハワイにおける日本映画について(鈴木2004)、食とレストランについて(浅井2004)など、現在に至る人々の生活に注目した論考も見られるようになってきた。これらを収録した後藤、松原、塩谷(2004)は、地域調査を継続して行なっている論文集だが、やはり歴史的

* 国際コミュニケーション学部 表現文化学科

な流れに重点が置かれている。

戦後ハワイへ移住した日本人の背景は多様である。その一つは、戦後、日系人を含むアメリカ人の花嫁となった日本人女性の移住である。戦後ハワイに来た世代の女性も70歳代、80歳代を迎えはじめており、日本とハワイとの関連の歴史をたどる上で、彼女たちを研究対象とすることは意義がある。もう一つの背景は、ハワイへの投資による駐在員や企業家の増加である。ハワイへの日本の投資、経済動向と密接に関連する駐在員等の居住は、長期滞在者ということになる。駐在員等の妻の場合、配偶者ビザで入国するため、アメリカでの就労はできない。長期滞在者の中にはそのままハワイに居を構えてしまったものも少なくない。また近年では、コンドミニアムを購入し、観光ビザで3か月までの滞在を繰り返す日本人も多い。

戦後日本からのハワイへの投資は、1953年日本航空ホノルル支店の開設に始まる。翌1954年に住友銀行がセントラル・パシフィック・バンクの設立を援助し、1959年に東急がアラモアナに白木屋を出店した。以来、多くの日本企業が進出している。1970年代に第1の波を迎えたが、本格的な動きは1980年代後半から1991年にかけてである。1980年代から1991年までの数年間に日本からの投資総額は約110億ドルであった（在ホノルル日本領事館HP）。おもな投資先はホテル、コンドミニアムの建設、ゴルフ場、リゾート開発、ショッピングセンターである。日本企業が所有するホテルの総室数はハワイ州の6割にも達したという（領事館HP）。しかし日本でのバブル経済が崩壊すると、投資は激減するのみならず、日本企業はハワイから撤退、不動産を売却するようになった。2000年前後からは個人商店を中心とした小売店、レストランの経営の動きが増加した。2008年現在、日系企業は約145社である。

ハワイの産業の中心は観光業である。ついで建設業、農業となる。観光業に付随して、コンドミニアムやホテルの建設などが進められるため、観光業と建設業との関連は密接である。2008年の日本人観光客数は117.5万人で、全観光客671万人の17.5%を占めている。また領事館HPによると、日本人観光客の一日あたり消費平均額は288.3ドルで、西海岸からの観光客149.7ドル、東海岸からの観光客182.1ドルと比較して圧倒的に高くなっている。

2000年の全国統計では、ハワイの人口121.1万人のうち日本人/日系人は29.6万人と全体の24.4%を占めている。この統計からは、日本人と日系人の区別をすることはできないものの、ハワイに生活の拠点を持つ日本人は少なくない。ビザ取得を要望する人は多く、ビザ支援のための会社も多数存在している。在領事館HPによると2009年8月現在、在留邦人は23,128人で、長期滞在者は9,654人、永住者は13,474人となっている。2001年のアメリカ同時多発テロ事件以降、アメリカで生活をするためのビザ取得は難しくなっており、受け入れの状況が明確であることが求められる。

日本とハワイとの関係は密接であり、ハワイに居住する日本人、観光客として来布する日本人は、ともに、ハワイ経済に影響を与えている。グローバリゼーションの進展は、日本との距離をますます近いものとしており、毎日4,000人近くの日本からの渡航者を迎え、日本の食材のほとんどをハワイで入手することができるようになってきている。そこに至る背景を作ってきたのは、日本企業の進出と観光業の進展であり、戦後のハワイ居住者に注目することで、その一面が見えてこよう。

そこで本稿では、とくに戦後ハワイで生活を営むようになった人々に焦点を当てる。戦後ハワイに移住した日本人がいかに自分たちの場所を築いているのか。そして現在いかなる課題を抱えているのか。ジェンダー的な課題を日本との比較において検討する。これまで研究を続けてきた女性が主体となって形成する生活空間（影山 2004 ほか）に注目して、ハワイにおける女性の生活を明らかにすることを本稿の目的とする。具体的には文化の異なる地域で、日本人女性がいかなる関係を築き、主体となっていくのか、イースト・ウェスト・ジャーナルが発行した『がんばるハワイの新一世』を中心に検討していく。

2. イースト・ウェスト・ジャーナルの発刊

ハワイにおいては、ハワイ報知（1912 発刊）、日刊サン（2003 発刊）など複数の日本語で発行されている新聞をあげることができる。イースト・ウェスト・ジャーナルもそのひとつである。イースト・ウェスト・ジャーナルは 1976 年発刊の日本語新聞で、月に 2 回、1 日と 15 日に発行されてきた。ハワイには古くから日本語の新聞が存在している。しかし、戦後日本から移動してきたハワイ在住の日本人に向けての新聞というのは当時存在していなかった。そこで、駐在員、主婦、学生などを中心に日本からの長期滞在者を対象とした新聞を発刊したのが本誌である。創刊号である 1976 年 10 月 1 日号に掲載された発刊のあいさつを見ると、「編集内容は、当地ハワイに住んでいて、より暮しを豊かにする知識、教養を盛りこんでまいります」と書かれている。「一人よがりにならぬよう心がけ、みんなで考え、そして企画した新聞にしたい」という編集者の言葉通り、新聞の内容は、ハワイの経済や政治から、身近な出来事や随想、ハワイにおけるサークルの紹介や人物紹介など多岐にわたる。日本の紹介もされているが、むしろハワイで生じている動向を分かりやすく説明するという、居住者に必要な情報源となっている。

発刊当時の購読料は送料を含め、年間 9 ドルであった。同時にファミリークラブの発足が告知されており、会員になると年会費は 15 ドルで、新聞が無料になるほか、年に数回の著名人を招いての食事会、後援会への参加、日本の製品の取り寄せ、伝言版のコラムの無料使用、日本への里帰りのためのチャーター便など様々な特典が考えられていた。

2003 年まで 27 年間有料紙であったが、ハワイではフリーペーパーも多く、2003 年 5 月 1 日号より無料紙に変更している。2007 年 9 月から発刊された web 版は 2008 年 8 月終了しており、さらに本誌自体も 2009 年 5 月以降発行されていない。

3. 連載「頑張る戦後一世」

イースト・ウェスト・ジャーナルには「頑張る戦後一世」という連載記事が年に数回出されており、本稿では、この連載に注目する。これは創刊時より近年まで連載が続けられてきたものである。その中から 1992 年に『がんばるハワイの新一世』という書が出版された。これは 1976 年から 1992 年までの記事を再構成して出版されたものである。この記事を中心に、戦後の移住者がどのような意識で生活を営んできたのかを明らかにする。

発刊によせて、編集長は「ハワイには駐在員以外に、いろいろなケースでハワイにきてビジネスで大活躍している日本人が多数おられる」ため、「一人ずつお会いする企画を考え」

たと記している。出版に当たっては、長期連載のため、90%は書き直したという。この企画は、実際にハワイで自分たちの新しい生活を切り開いてきた人々の記録であり、その言葉の重要性に注目する。

とりあげられているのは144組で、そのうち女性は34人、夫婦が7組である。こうした企画で夫婦を除く137人のうち女性が34人と4分の1を占めていることは驚くべきことである。ハワイにおける女性の進出が目覚ましいものであることの表れでもある。そこで女性を中心に、ハワイでの生活と仕事との関係について検討する。

特にハワイへの移住にまつわる動向、ハワイ社会への参加、女性の地位と家族との関係という4つの側面に注目して、記事を分析していく。本書に登場する人々の職業は、ホテル業、飲食店、旅行会社と観光関係の仕事が多い。また保険業、銀行員などの仕事に就いている人も見受けられる。画家、伝統芸能、宗教家など、専門的な職種の人たちも登場する。彼らへの質問を通して見えてくるハワイでの日本人の生活を描く。

(1) ハワイへの移住

この連載には、結婚によりハワイで生活を始めた女性が多く登場する。婦米二世の夫と結婚してハワイへ移住したAさんやBさん、1964年にハワイに来たCさんや、国際結婚をした夫の仕事の都合で1982年にハワイにきたDさんなど、結婚や夫の転勤は女性にとって重要な転機となっている。「今なんか好きな時に結婚できるけど、私の時なんかアメリカ人と結婚するとなると、今年は許可が下りる、来年はダメというふうに、思うようにいかなかった。だから結婚の許可が下りたら一度にパッと結婚式」と語るEさんは、日系の陸軍少佐と見合いをして結婚し、ハワイでの生活を始めている。

一方、夫と死別したFさんのように、配偶者と別れた後もハワイでの居住を続ける人は少なくない。日系二世と結婚したものの、2年で破綻したGさんは、親の反対を押し切ってハワイへ来たため、「おめおめとは帰れなかった」という。「とにかくお金を貯めよう」と日本人バーに勤め、独り立ちをする。結婚生活は破綻しても、ハワイでの生活を続け、この場所に根をおろしているのである。

ハワイという場所に心を惹かれて居住するようになった人も少なくない。Hさんは夫が不慮の事故に遭い、ケンタッキーから帰国する途中で妹のいるハワイに立ち寄った。心の傷をいやしているうちにこの地に住むことを決めた。女性の武道家として話題となりマスコミで紹介されたIさんは、ハワイの日本人商工会議所と縁ができ、「天涯孤独な身、未熟ながら頑張ってみよう」と来布している。美容師のJさんは「オリンピックの前でしたか、英語を話せる人を養成しようということで、私が選ばれたわけです。ところが帰らずに、ここに居座っちゃった」とハワイでの生活を選択したことを明るく語っている。K夫妻は、「子供もいないし、廻りから見れば無茶苦茶に見えるでしょうが、本人たちは別に」と念願だったアメリカへの渡航の帰りに立ち寄ったハワイに魅力を感じ、移住を決めた。

戦後移住した日本人にとって、ハワイは快適な生活のできる場所として確立されていった。Eさんが、「3年ハワイに居て、ヴァージニアに移りました。あの頃は反日感情のまだ強いころで、一年が十年位に感じましたね。それに英語もよくわからないし、地団太を踏みました。一年後ハワイに戻った時はほっとしました」と語っている。2009年に実施した個別の聞き取り調査でも、複数の国に居住したことがある駐在員の妻は、ハワイで生活し

ていると、ほとんど差別を感じることはないと言っている。多くの国で、日本人であるということで、悪口を言われたり、軽い嫌がらせをうけたりして、不快な思いをしたが、ハワイでは日本人であることが決してマイナスではないことが特徴だと彼女は指摘した。ハワイという場所が、彼女たちにとって居心地のいい生活空間として形成されているのである。

(2) ハワイ社会への参加

戦後移住してきた日本人がハワイでビジネスを展開するにあたり、日本人であることを生かした商売を展開する人は多い。必ずしも従来の日本的経営方針ではなく、日本人を対象に、日本語を生かし、さまざまなアイデアを駆使してビジネスに参入しているのである。

本格的な日本書店を開店したLさんは「ハワイでも、日本書籍がこんなに揃っているとされるような本屋を目指して」始めたという。委託販売ができず、買い取りで運営していたため、仕入れに最も神経を使ったという。また「久しぶりに会って、ちょっとお茶でもと寄れるサロンの店を」と、書店の中に喫茶店も開店した。残念ながらこの書店は2001年を最後に閉店してしまったが、その際にも彼女は、「日系二世でも日本語の読める人は大勢いたし、80年代は戦後一世が増え、日本人社会が上昇していたころで、日本の本屋さんらしい書店が出来たと言うので喜ばれました。」「ローカルの人たちの日本文化、慣習、伝承の説明に貢献したと思いますよ。日本文化をしょっているつもりでやっていました。」と語っている。「私の場合、ガンバリ屋だから、何とかなるんじゃないかと、何とかしようという気持ちが強かった」と振り返る。

観光業に従事するにも、当初は駐在員が客を案内するお手伝いをと始めたガイドツアーや、ハワイでのメディアの撮影隊の支援をするロケーション・マネージャ、女性パイロットから観光飛行会社の設立など、ハワイという地の利を生かして、想像力豊かな業種を開拓していった。Mさんは「ハワイが好きで仕方がない。私がハワイをいいと思えるのは、外から来た人間だし、外もよく知っているからです。」と冷静な判断力のもとで自分の仕事を切り拓いている。1968年にハワイに来たNさんは「知り合いもなく淋しいし、何かしたい」とガイドになったが、ガイドに保険をかけた会社を作り、また観光客の要望をもとにフルーツを用意したり、花をそえたり、「チャレンジ精神を忘れたことはない」と語る。Oさんの場合開業当初は苦労した。「最初の6ヶ月は売れなくて戸惑いました。あれが私のターニング・ポイントでした。いろいろ考え、みなと競うことを考えないで自分のやり方でいこうと気がついたのです。それから自分のペースでやれるようになりました」と語っているように、周りのペースではなく自分たちのやり方を進めることも重要であった。たとえば、ニュースレターを郵送する際に手書きにして、「手書きが効果的？これは計算済み……私はわざと手書きにしました。」と指摘するように、工夫を施した。またPさんは、アメリカでは普及しているが日本語はなかったアンサリングサービス電話代行業と秘書サービスを企業化し、成功させている。

「頑張る」という言葉は仕事を続ける女性たちの中でキーワードになっている。Jさんは「何でもやりだすと、終わるまで一生懸命」で「頼まれると断れない」、「忙しいからこそ、時間を大切に使える」し「私の世代って頑張りがきくみたい」と自分の仕事への姿勢を分

析している。カメラマンのQさんも「機材も結構重いし、体力がないとできない仕事ですね。体の具合が悪いとまず精神的に落ち込むでしょ。そうするとクリエイティビティーもわいてこない。一に体力、二に体力、芸術性はそれからです。この仕事って一人で処理していかなければならないということもありますが、群を作ってというより自分で何でもさっさとやってしまう」と頑張っている様子を語る。Eさんも「私って喜ばれれば、すぐ乗って頑張れるタイプなの」と笑っている。

仕事に対してOさんは、「基本は人の気持ちになって考えること」と語る。「最近はいいい面を見ることが多く」なった「反面、怒るとパァとはっきり言うのでうるさいオバサンと思われている」とみている。「私がけんかするのは権力を持って下の者に無理強いする人が相手。高圧的に出てくるとカアツとくる」と自分の態度を評価した。

「ハワイへ来た以上」「何も形が残せないままでは帰れない」といった言説が、日本とハワイとの距離を示している。しかしその一方で、ハワイに魅力を感じ、それにこたえるかのように自分たちの仕事を着実にこなしている日本人は多い。対等な立場を勝ち取り、「頑張る」ことで信頼を得て、地域に根付いていっているのである。

(3) ハワイにおける女性の生活

女性が地位のある仕事に就くのは難しい。日本では1986年の男女雇用機会均等法が不完全ながらも女性の地位の向上に一石を投じた。アメリカではそれ以前から女性の社会進出は進んでいる。しかしハワイにおいても、女性が男性と対等に仕事をするのは、容易ではなかった。1973年インターナショナルセービングス & ローンの副社長兼モイリイリ支店長に昇格したRさんも、昇格に際して女で大丈夫かと危惧されたそうだ。「それみろ、と言われたくない。私は負けん気が強いから。でも女性とか、男性とか考えないで、自分のゴールをクリアすればいいと思いました。」と、自分の目標を達成することで女性への信頼を築いていった。日本で女性が管理職を手にするために戦っている時期に、管理職の地位で努力を重ね、実力を発揮した人がハワイでは存在していた。しかし日本よりは選択の幅が広がったとはいえ、女性に対する差別は存在していた。Dさんは「女性が男性と同等で仕事するのはやはり難しいところがありますね。仕事をバリバリやっている女性たちと話すとならぬからというので叩かれることもあるという話になる」と指摘している。

一方で、男性を皮肉っている言説もみられた。Sさんは、「私が自分のオフィスにいるとミスターSに会いたいと来るわけです。来客は白人男性を思い浮かべ、私を見て驚くわけです。その顔を見るのを楽しんでいた……」と、いかに白人男性を中心に社会が構成されていたかを振り返っている。

女性たちにとって、地位のある職に就くことは、注目を浴びることであり、それだけにプレッシャーも大きい。しかしここに登場する女性たちは、その抑圧をはねのけて自分たちの機会を生かしている。「家庭生活では、主人はよくしてくれたし、子どもたちは元気だったけれど、仕事の上では、日本人であること、女であることのハンディーをかかえてやってきた」というMさんは時々父の言葉『猛虎交江』の言葉をかみしめると語っている。不動産を営むTさんは「始めてから“しまった”と思ったけれど、せっかくやり始めたんだから、最後までやりぬいた」と語る。Hさんは「人のやっていないものをやりたいといつも思っていたし、人に出来て私にできないものはないという考え」を持っている。「平凡

ただお客さんの喜ばれる顔を見たくて一生懸命やってきたということかしら」という言葉にも見られるように、がむしゃらに走ってきた感もある。彼女は「おっちょこちょいだからあまり深く考えないですぐ行動に移してしまう。この会社も二年半頑張ったけどくたびれ損。オイルショックで74年に悪くなってしまったの」と一度失敗した後も奮起している。地道な努力と信念が彼女たちを支えていた。

(4) 家族との関係

女性が仕事を続ける上で、家族との関係は重要である。PRディレクターだったDさんは「万事うまく行ったはずなのに、十年目ごろから、こんな生活していいのかなあと疑問がわいてきた」。そして結婚後は「一時はおとなしくしていたの。何でも一生懸命やる方だから家事に専念したわ。でも動かないとどうも落ち着かなくて」仕事を始めた。夫の仕事でハワイに移動してからは、PR、マーケティングなどそれまでのキャリアを生かして仕事を続ける。しかし彼女は、がむしゃらに働くのではなく、自分のペースに合わせて、家族もともに歩んでいけるスタイルを見出している。U夫妻の場合、妻が社長で、夫が副社長を務めている。夫は「社長が僕というのではありきたり。注意を惹くためにも彼女が社長になりました。内心女性を認めたくない部分ってあるんですが、彼女に能力があるからどうしようもありません。」と語る。家父長制の枠に理念的には囚われていても、それを言葉に出し、同時に新たな形態を模索している柔軟さがある。

仕事との関係で、多くの女性が夫の協力に感謝したと語る。Vさんは「彼は、私に好きなことをさせていると一番いい顔をしていると思っているんじゃないですか。もったいないぐらいよくしてくれて。彼におんぶさせてもらっています。」と感謝しており、Wさんも「この時代の人には珍しく女性が仕事をすることに理解を示してくれています」と語る。Xさんは「この仕事は時間的に縛られると聞いていたので、主人の協力がなきゃいなあと思」っていたという。退職後の夫は、Xさんの手助けもしているそうだ。彼女は「結婚していると、どの職業にいても夫の理解がないと女性は成功しません」と指摘している。夫の希望で歌を歌う仕事をやめ、主婦をやっていたというYさんの場合、主婦業は今までの生活と違いすぎたという。暇を持て余しているところで仕事の誘いが来て、夫も復帰を許してくれた。ナイトクラブを経営することになったときは「本当に冷や汗もの」だったが、「歌うことがことが好きだから、自分が好きな時に歌える場所が欲しかったのね。水商売には向いていない性格でよくやっていましたよ」と自分をほめながら振り返る。Zさんの夫も「女は家にいるもの」という考えの人だった。はじめは仕事を持たなかったが、肩こりのひどい夫のために日本で買った中山式足踏みマットに効果があったのがきっかけで、販売を手掛けるようになった。家でいるより外で仕事をしている方が好きというZさんに夫もあきらめたという。彼女は、「仕事があってよかったと思ったのは主人を亡くしたあと。子供が二人いるし、いつまでも悲しみに浸ってられないでしょ」と語る。家父長制的な意識は残しつつも現実には仕事することで生活を支えてきたのである。Hさんも「未亡人になってから子供のために生きようと決意したしね」と生計をたてるために仕事が必要であったことを指摘している。

「主人が同じ業界にいるので、私の仕事に理解を示してくれ協力してくれました。私たちの頃は、女性がバリバリ仕事をしようとする、独身でいくか、配偶者に理解があるか

でない」と難しかったですね。」とSさんは語っている。これは現在の日本も同様であろう。Oさんの場合、「彼が私の仕事に合わせていけるということで結婚」したという。彼女は、「維持できる結婚でなければ結婚の意味がない」と語る。姓名を変えることに関しても「名を変えるのもビジネスで不便なんです、私も日本人ですね。そのままでは抵抗を感じて」変更している。「仕事だけでは鉄の女になって人間的な味はないでしょ。結婚は私の部分のプラスになってくれています」とOさんにとっての結婚の意味が示される。

Lさんの場合「27年前に、日本を出た時、日本人として恥じないことを念頭に置いてきました。日本にいたならあんなにしなかったかもしれませんが、“日本人の奥さんだから、アメリカのことは何もできない”と後ろ指さされることがないように、料理からマナーまでしっかり勉強しました。また日本へ行った時は、アメリカ人として恥じないように頑張ったことを語る。「主人のリタイヤーもありましたし、私もこのまま主婦で終わりたいくない気持ちが強かったし。店を買ってからは店へ全力投球で百八十度の転換。主人と子供には悪いけれど、店にかかりきりです。でも本当は両方やりたいなあ。料理や洋裁などもやっているときは楽しかったですから」。「一生懸命やっていた前の私を見ていたから、今度はお返しのつもりで私に好きなことをさせてくれています。本当に主人には感謝しています」。「ほら、両方の文化をしょっている私だから」と、家族との関係が密でありながらも、Lさんは自分の人生を邁進し生活空間を築いているのである。

Zさんは「ハワイに来てからいろいろなカルチュアショックもあったし、そのためには地域団体に入り違う世界に触れたかった」という。「余計なヘディックはつくりたくないからといって団体を敬遠する人もいるけれど、一生のうちいろいろな力が出てくると思うんです。だから自分から自分の枠にはめてしまうと成長がないんじゃない？」と多様な活動に積極的に参加している。

夫の協力が女性の社会進出に影響を及ぼすが、ここに登場する人たちの事例では、家族が妻や母に協力する体制はあるようだ。しかし「あきらめて」「仕方なく」といった言説にみられるように、全面的な協力を得ているわけではない。女性たちは努力して男性の協力を勝ちとり、自分のペースを作り上げているのである。

4. ハワイでの生活と女性の地位

本稿では、イースト・ウェスト・ジャーナル誌を中心に、戦後日本からハワイに移住した女性に焦点を当てて、彼女たちの生活を検討した。新聞上に掲載された記事は人生の一部にすぎず、また女性のかかえる問題をとらえるには資料が十分とは言えないが、ハワイで生活する女性の一断面を描くことは可能である。彼女たちはハワイで生活を営み、自分たちの活躍の場を獲得していった。これは、彼女たちが生活空間を形成する過程でもある。新一世である男性が仕事を契機にハワイに来ている例が多いことと比較すると、女性がハワイに来る契機は結婚である割合が高い。使命感や挑戦としてハワイに移住する事例もあるが、人生を選択する機会となる結婚が海外での生活につながっていることが、男性との決定的な違いである。海外で生活することは異なる背景を持つ空間への新たな闘争であり、家庭や職場などで主体となって生活空間を築いている事例とみることができる。

結婚が破談したときも、日本に帰るという選択肢を必ずしも選んではないことが特徴

的である。アメリカ社会は日本よりも離婚率が高く、日本の閉鎖的社会よりも職業選択の幅は広いかもしれない。しかし離婚することで生じる課題に立ち向かい、「おめおめとは帰れない」といった言説の通り、ハワイで「頑張ってる」いる。彼女たちにとって、ハワイで生活するという決意は強固なものである。自分の生活の基盤をハワイに移し、この地で自分の場所を築くべく努力を重ねているのである。

女性にとっては、社会に出て働く際に家族の協力が不可欠となっている。彼女たちの言説からは、家族に対する家父長制的な価値観が散見された。聞き取り調査で出会った女性は、自分が家を守る必要があるという日本の価値基準を海外でも長い間持っていたことを指摘していたが、それぞれの人のなかに女性の役割分担の意識は強く存在していた。結婚相手が必ずしも日本人ではないことで、女性の置かれた位置も日本とは異なる形態を見せるが、それでも女性の担う役割分担は機能していたのである。一方で、夫婦で協力し合っただけでハワイに憧れて居住してきたという事例では、自分たちの方向を探りながら、自分の生活の場の形成に尽力している言説が見られた。妻の方が優秀だからという言葉は、日本ではなかなか聞くことができないであろう。社長を女性が勤め、夫がその補佐にまわる例は非常に少ない。独特な事例であるのも、女性の地位を検討するうえで興味深い。

戦後、日本から移住した人々が築いてきた関係性と空間は、男性のみならず女性にも多様な機会を与えている。仕事や、家族との関係、自分の位置の確認などを通して、ハワイにおける生活空間を創造しているのである。

参考文献

- 浅井易 (2004) 移民のレストラン—サイミンから探る日系人の移動と出会い。後藤明, 松原好次, 塩谷亨編『ハワイ研究への招待: フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会 pp. 185-196.
- 飯田耕二郎 (1998) マウイ島における日本人の居住地と出身地・職業構成。沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容 1920年代のマウイ島の事例』ナカニシヤ出版 pp. 275-308.
- 飯田耕二郎 (2003) 『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版
- イースト・ウェスト・ジャーナル (1992) 『がんばるハワイの新一世』
- イースト・ウェスト・ジャーナル (1991) 『新ハワイ百科』
- 王堂フランクリン, 篠遠和子 (1985) 『図説ハワイ日本人史 1885～1924』ビショップミュージアム
- 影山穂波 (2004) 『都市空間とジェンダー』古今書院
- 後藤明, 松原好次, 塩谷亨編 (2004) 『ハワイ研究への招待: フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会
- 久武哲也 (1998) マウイ島における砂糖キビプランテーションとエスニック構造。沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容 1920年代のマウイ島の事例』ナカニシヤ出版 pp. 309-382.
- 久武哲也 (1999) ホノルル大都市圏におけるエスニック構成—プランテーションの遺産と制度的人種主義—。成田孝三編『大都市圏研究 (上) —多様なアプローチ—』大明堂
- 城田愛 (2004a) ハワイの日系・沖縄系移民社会の歩みと動き—博物館に見る生活文化の過去, 現在, 未来。後藤明, 松原好次, 塩谷亨編『ハワイ研究への招待: フィールドワークから見える新しいハワイ像』関西学院大学出版会 pp. 137-154.
- 城田愛 (2004b) オキナワンの踊りと音楽にみるハワイ社会—エスニシティの交差する舞台から。

- 後藤明, 松原好次, 塩谷亨編 『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』 関西学院大学出版会 pp. 249-260.
- 鈴木啓 (2004) ハワイの日本映画. 後藤明, 松原好次, 塩谷亨編 『ハワイ研究への招待：フィールドワークから見える新しいハワイ像』 関西学院大学出版会 pp. 155-166.
- タカキロナルド著, 富田虎男, 白井洋子訳 (1985) 『パウ・ハナ：ハワイ移民の社会史』 刀水書房
- 中嶋弓子 (1993) 『ハワイさまよえる楽園：民族と国家の衝突』 東京書籍
- ハワイ報知 (2008) 『アロハ年鑑第14版』
- 山中速人 (1992) 『イメージの「楽園」：観光ハワイの文化史』 筑摩書房
- Okamura, Jonathan Y. (2008) *Ethnicity and inequality in Hawai'i*. Temple University Press
- Okamura, Jonathan Y. (2001) *The Japanese American historical experience in Hawaii*. Kendall/Hunt
- Kotani, Roland (1985) *The Japanese in Hawaii: A century of Struggle*. The Hawaii Houchi.
- Yano, Christine R. (2006) *Crowning the nice girl: gender, ethnicity, and culture in Hawai'i's Cherry Blossom Festival* University of Hawai'i Press
- 在ホノルル日本国領事館
(http://www.honolulu.us.emb-japan.go.jp/jp/kakushu_yoran_jp.htm 2009年9月23日)